

ものであり、その謠ひ方と踊り方とに種々の名稱がある。藩政の時盆踊は孟蘭盆前後の夜に於いてするを普通としたが、能登では祭禮・田休の際にも行はれ、甚だしきは休日毎にする緩目踊の如きもあつた。

マ

マア 麻阿 前田利家の第三女。元龜元年出生。初め利家の柴田勝家に興力した時、麻阿は質として北ノ庄城に在つたが、天正十一年柳ノ瀬の役に勝家の敗戦歸陣した後、近れて府中に歸つた。後に豊臣秀吉の側室となり、加賀殿と稱せられたものである。世本或はいふ。加賀殿は天正十三年閏八月秀吉が佐々成政を越中に征した歸途、金澤から伴うたのであると。しかし現存の文書に因つて考へるに、その上洛は天正十四年五月の頃にあるらしい。加賀殿多疾、初め聚樂第の天守に住し、後利家の京都邸又は伏見邸に移り、慶長三年三月秀吉の醍醐の花見にも従うたが、次いで暇を得、大納言萬里小路充房に嫁し、更に離別して十九年十月十三日享年三十四を以て歿した。法號祥雲院。京都大徳寺塔頭芳春院に葬られた。青地禮幹の本藩系譜略に、麻阿姫の一名を阿茶とも少將ともいうたとするものは、その侍女の名を混じたものである。→アチャコ 阿茶子。

マアキラ 間明 マギ 石川郡米丸郷に屬する部落。
マウラ 眞浦 珠洲郡西海郷に屬する部落。

マア—マキ

能登各跡志に、『眞浦。家數十軒許あり。權兵衛などよき百姓あり。此邊は西海の郷といふ中にも遊郎の片うらわなり。前は滄海漂々として、後は岩倉の山賊々たり。左はひろぎの蛆端巖々たり。右は朴坂の峠嶺々として、誠に閑静いはん方なし。御鹽藏の傍に薬師堂あり。丈六の金色の大像也。』とある。
マガヘ 馬替 イガ 石川郡宮樫庄に屬する部落。上古馬飼の居た所であらうといひ、龜尾記には馬替を馬市の意だとしてゐる。郷村名義抄に、この寺の塔に狩野法眼の繪馬があつたからだといふは、地名に就いての俗傳である。

マガヘシヤ 馬替社 マガイ 石川郡馬替に鎮座し、今は馬替神社といふ。承應二年河崎秀俊書入の三州式社考に、式内石川郡御馬神社を馬替村に在るとし、越登賀三州志にも一説としてそれを擧げてゐる。
マガラノオホダチ 眞柄の太刀 白山比咩神社蔵に眞柄の太刀と稱する行光銘のものがあつて、朝倉義景の臣眞柄十郎左衛門直元の用ひたものであると傳へる。世本多く之を相州行光の作とするは誤謬で、加賀の行光作に相違ない。刀身二米五七、在樋・五・目とし、本研を施さないから作の優劣も疵の有無も知れぬが、外貌頗る雄偉豪宕である。後に前田利常之を修装せしめ、梅枝の圖按を鍍銅した四分一製の鐮口金具を附してあるが、それには寛永五戊辰曆十一月吉日加州金澤住後藤才次郎吉定との銘が刻せられて居る。又別に右兵衛とも刻されてゐるのは、吉定の兄弟右兵衛清定(一名兵庫頭清永)の合作した部分もあるに因るのであらう。

マガリ 曲 石川郡湯涌郷に屬する部落。
マガリ 曲 鹿島郡能登島庄に屬する部落。文明十三年正月向田代官三階家吉の判書に鈎村とあるものは是である。
マガリマツ 曲松 觀應二年九月得江石王丸代長野彦三郎家光の軍忠狀に、『九月十六日同國自大津長左衛門尉秀信打出間、屬家光彼手、取三引保内曲松要害之處、凶徒等寄來當陣、日々合戦致無貳軍忠狀。』とある。三引保は鹿島郡であるが、その内の曲松といふものは今明らかでない。

マキ 牧 江沼郡浦原の内の小字。
マキ 牧 河北郡小坂庄に屬する部落。
マキ 牧 河北郡五ヶ庄に屬する部落。承應の村御印に朝日牧に作り、明治中又朝日牧に復したるものは、附近深谷村の一部に牧の部落があるのと紛らわしいからである。
マキ 牧 河北郡深谷の内の小字。

マキグチ 牧口 能美郡栗津郷に屬する部落。寶永誌に、この村領に牧嬢塚といふて石佛一體がある。皇女牧嬢この地に流され給うて、薨去の後石佛を都より下し、その塚の上に立てたのであると記するが、固より俚談に過ぎぬ。
マキグチ 横口 能登の邑名であるが今は存せぬ。高野山金剛峰寺寶龜院所蔵の傳法灌頂次第奥書に『本云。文明七年乙卯九月十五日於能州石動山天平寺妙觀院、爲末代末練聲、試老眼終夜草之。更不可有他見而已。安祥寺法印權大僧都隆快。明應四年六月廿一日於能州横口住坊、以隆快御自筆如形寫置也。更不可他見。安祥寺二位法眼大和尚位光意。』と見える。安祥寺も亦横口に在つたのであるが、

後世之を見ぬ。
マキサカ 巻坂 四至郡大川から里の部落に至る間の坂。
マキジンザエモン 牧甚左衛門 父を左衛門といひ、織田信長の臣であつた。甚左衛門前田利家に仕へて祿二百石を受け、子孫藩に世襲する。

マキセイキチロウ 牧清吉郎 文化十一年父七郎左衛門の遺知百五十石を襲ぎ、御射手に屬したが、文政四年七月九日不届によつて一類預となり、次いで揚屋に收容せられ、十二月赦に因り死刑を減じて越中五ヶ山に流された。
マキタジロベエ 牧田次郎兵衛 山口宗永の臣。慶長五年八月前田利長大聖寺城討伐の時、鐘丸の守將であつたが、山崎庄兵衛長國と合兵して戦歿した。

マキタダスケ 牧忠輔 通稱昌次郎。昌左衛門。兄圓之助忠一は四百五十石を領して明和中歿したが、不届によつて跡目相續を命ぜられず、後安永中に及んで忠輔に亡父遺知の中二百石を興へられ、御算用揚横目・御大小將組御武具奉行より、寛政三年小松御番頭、享和三年物頭並開番に至り、文化七年之を免ぜられ、九年幕府から尋問の廉あるを以て召されたが、一門に預中氣滯によつて未だ出發せずして、翌十年四月廿二日歿した。軍役内考。淺井戰圖覺書等の著がある。

マキタダノリ 牧忠敬 通稱彦左衛門。初め前田吉徳に仕へ、新知百五十石を受け、大少將・御膳奉行から、享保九年御廩所奉行に轉じて百石を加へ、後組頭並となつて二百石を加へ、寛延三年指除遠慮、四年御免、寶曆